

---

# Milestone

Campanella

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Milestone

### 【Nコード】

N4029E

### 【作者名】

Campanella

### 【あらすじ】

いまから遙か未来、破滅的戦乱の後、文明を代償に平和を取り戻した世界があった。平和は永続するかに思われたが、いままた、新たな『文明』が生まれようとしている…。

## 序章：禁じられた森（前書き）

未来とか言ってますが、基本はファンタジー路線だと思っております。続けて読んで頂ければ嬉しいです。

## 序章：禁じられた森

それは、いまから遙か未来のこと。

極度に発達した文明同士の間によつておこされた戦争によつて、95%の生物が絶え、世界は破滅寸前の状態に陥っていた。少なくとも、あの時誰もが、世界をあきらめていた。

しかし、その時現れた何者かが、世界を滅亡から救った。

彼は、その元兇なる人間たちに条件を出した。

現代文明を放棄する代わりに、世界に今いる生物の生存、繁栄手段を

「残して置く」ことを。

「残す」…つまり、星の再繁栄が約束されたわけではなく、星の存亡はその先の生物…殊に人間にかかっている、と言うことだ。

人類を代表する何者かはこれを承諾し、戦争は終わった。

その後、残った国々の首長の取り決めで、あらゆる文明機械は放棄されることとなる。…世界は一次産業革命直後まで逆戻りした。

そして、更に長い年月が経った。かつて使われていた、あらゆる技術が復活することはなかった。

欲深い人間たちとは言え、遠い過去のあまりにおぞましい記憶は代々伝えられていった上、

「何者か」がそれを封じていたからだ。

しかし、

やはり人間は欲深だった。  
かつての技術がためなら、と各国は近代文明とは別の新たな技術を探り始めていた…。

序章：禁じられた森

空は今日も青空で。

街は少し油断を感じさせるほどにのどかだった。 平和という言葉  
葉がびったりな日常が今日もそこに流れていた。

こんな現実を目にすると…

あのおぞましい歴史の話なんて嘘のようだ。

今日、歴史の授業で先生が話したのは。いわゆる『近代』と呼ばれる時代の歴史で。

つまり、世界を破滅寸前にまでおいやった『あの戦争』のことだった。 そのもつと昔はいまより遙かに進んだ文明があったという。遙かに進んだ文明…。

僕にはピンとこないんだ。

僕はいまの生活にことさらに不便は感じないし、この文明が遅れているようにも思わない。

これ以上便利な生活って、どんなものなんだろう？

興味がないわけではないけど、あの歴史の話を聞いた後では…。

まあ、平和な今で充分だよな…。

昼休みになると、いつものようにクラダハイムと一緒に昼食を取るため、大広間に行った。

「なあ、知ってるか？ あの『禁じられた森』の噂。」  
クラダハイムは会うなりそう話しかけて来た。いつになく、やたらと顔に好奇の色が浮かんでいる。

「『禁じられた森』？ まあ、あそこは禁じられているだけあつて、かなりいろんな噂がたつよな。戦争で死んだ人の幽霊が出るとか、かつて誰か自殺したとか、あそこに入ると出てこられないとか……。」

禁じられた森 ……それはこのチエルノーブルの東側にある森で、未成年は愚か、全ての人の立ち入りを禁じている、まさに『禁じられた森』だ。

今も言ったけど、禁じられた理由は一切知られていないせいでも、様々な憶測を呼んでいる。

「…そう、それでよ、なんかあそこに政府の役人みたいなやつとか、研究者みたいなやつとかが密かに出入りしているらしいんだよ。」

「…まあ、なにごとにも例外は存在するってわけだ。」

「へえ、それはまたどうして？」  
いつになくクラダハイムは真剣。ソーユーデマとかに簡単に飛び付く奴じゃないんだが。

「どうも、あの中には、国の偉い方が欲しがる何かがあるらしいんだ。でも、ほら、あの辺はもう国境近くだろ？ 隣りの国にそれを取られるのを恐れているんじゃないかって話よ。」

「何か、って？」

「近代文明のヒントか、あるいはエネルギーみたいなものなんじゃないかって噂になってるぜ。」

「ばかな、だってあれは封印されたって… それに、そんなものを復活させたら、また戦争がおこるじゃないか？」

「まあ、そうだが、でもあの文明の力はすごいらしい。もし一国が独占できたら世界なんて簡単に支配できてしまうっていうからな。」

…国が欲しがるとも、そして取られるのを恐れるのも当然つてわけだ。」

…そう、誰もが知っていたんだ。

それに手を出せば、再び世界が危険さらされることも…そして、それを独占できたら、世界を支配する程の強国になりうることも。

「でも、そういった文明は全て、『偉大なる者』によって封印されたんじゃないのか？」

これもまた僕らは、歴史的事実として教えられていることだった。

「…さあな、もちろん『文明』が残っているというのは噂にすぎない。だが、政府の研究者らしき奴が入りしているのは嘘じゃないみたいだぜ？夜中にこっそりと入っていくのを何人もみてるってんだからな。どっちにしる、あの『禁じられた森』にはなにかがあるらしいな。」

ここまで聞くと、次の彼の言葉は予測が付いた。

「どうだい。一つ、今日の夜中に、あそこに忍び込んで見ないか？」

…やっぱりな。

「…って言ったって、あそこは入れないようにバリケードが張られているんだろ？」

「なに、かつてなら監視に便利な機械があつたらしいが、いまと成っては所詮監視は、人と番犬くらいのもだからな。それに昨日、正門からだいぶはなれたところでバリケードに穴が開いてるのを見つけたんだ。あそこなら、監視用の詰所もなかったみたいだし、入れるんじゃないかな？」

確かにそれは一理ある話だった。近代の電子機器なんかなくなつてしまつた現代。監視カメラもセンサー付き警報器も電流の流れる金網も『過去の』ものだった。

当初は治安の悪化が心配されたけど、犯罪者のほうだつてコンピュータやらなんやらは使えないから、古典的手法に頼らざるを得ないわけで、それ程犯罪が増えていくわけでもないようだ。

…そんなわけで、半ば無理やり僕はクラダハイムと共に『禁じられた森』に潜入することになった。

…と、言っても正直僕にも興味が無いわけではなかったし、確かに彼の言うとおり、森に潜入することがそれ程無謀のこのようには感じなかった。

時計塔がその日の終鐘 …つまり午後十時を知らせた。真夜中に鐘がなつても近所迷惑なだけだから、時計塔は朝6時〜夜10時の間だけ、一時間毎に鐘の音をチエルノーブルに響かせるのだった。

街の中心に行けば、まだ機関車もでているから、人がいないと言うこともないけれど、大きな都市チエルノーブルの東端にあたる森のあたりでは、見受けられるのは森の入口の監視員くらいだった。

僕らは森の正門から2キロ南にある運動場で待ち合わせた。

別に長旅に出るわけでもないから、お互い持っているのは懐中油灯と、少しのお金…。森に行くのに鞆なんて邪魔なだけだろう。

「懐中油灯はまだつけるなよ。たぶんみつかりっこないだろうが、ムダに目立ちたくないからな。」

運動場から森のバリケードへむかう途中クラダハイムが言った。

このあたりはチエルノーブルの中でも特に寂れているところである。その間建物はほとんどない。もちろんすれちがう人も全くなかった。

三十分ほど歩いただろうか、目の前に『禁じられた森』とチエルノーブルを遮る金網が見えて来た。

それは高さ十数メートルまで張られた金網で、上の方には鉄条網も張られている。まあ、普通なら上るのは無理だろう。

近付いて来るに連れ、その根元の地面近くに隙間があるのが確かに見えて来た。



金網が破れたと言うよりは、長い間に金網のしたの地面が若干沈んだかのようになっていた。

まさに灯台下暗し…と言ったところか。  
なるほど、確かにひとりずつなら人が通ることは出来そうだ。

禁じられた森…金網の向こうにはただ暗闇が広がっていて、そしてやはり真つ暗な木々が繁っていた…。

僕は一瞬その先を進むことにためらいを覚えたが、クラダハイムはもう既に金網をくぐる途中だった。

いやおうなしに僕も後を追った。

木々が繁っていて進み辛いかと思っただけで、いざ中に入って見ると意外と木々の感覚は広く、進むことはそう難しくはなかった。

前を歩くクラダハイムは全くためらいなくずんずん進んでいくので、僕はただそれについていった。

「なあ、いったいなにを頼りに進んでるんだ？何の目印もない森だつてのに…。」

と、言いかけたところで僕は彼が右手に羅針盤を持つてることに気付いた。

「なんだ、持ち物なんて懐中油灯くらいかと思っただが、ちゃんと持ってたんだな。」

「あたりまえだろ。これがなきゃ進めないどころか、帰れるかどうかも怪しくなるぜ？」

禁じられた森の広さは知らされていないけれど、東隣りの国まで行く時、僕は汽車で数時間かけていくから、国境に広がる森も、ある程度の広さがあると思われる。…まあ、冷静に考えれば、羅針盤は必需品だ。

「とりあえず、東へ進んでいるんだ。まさかこのままアルニカ帝国まで行っちゃうとは思わないけどな。まあ、着いてしまっても、

財布に旅券は入ってるから、そこまで問題もないけど…おまえも財布くらいは持つて来たよな？」

僕は当然のようにうなづいた。僕らの住む国、グランルーシ国と東隣りのアルニカは比較的仲がよく、旅券さえあれば比較的自由に行き来出来る。

僕らの年齢になれば、しばしばアルニカまで出かけることもあるから、財布のなかに常に旅券をいれておくのは、常識のようになっていた。

…そう、アルニカとグランルーシは仲が良いのだ。それなのに、『現代文明』ともなると、取り合いになってしまったりするのだろうか。

…まあ、あり得ないことではない。何らかの権益の取り合いが、対外関係を悪化させるなんてのは、歴史上幾度となく起こっていることだ。

そんなことを考えていた時、急にクラダハイムが足を止めた。

「どうしたんだよ？」

僕はあやうくぶつかりそうになった。

「…ここ、道になってないか？」

「え？」

クラダハイムは懐中油灯を右、左、と照らした。

なるほど、確かに木々の切れ目が通っていて、馬車が通れるくらいの広さの道が南北に伸びているようだ。

「随分整備された道だな。ほとんど凸凹がない。」

「例の政府の役人が通る道かな。」

それは生い茂る木々とは若干不釣り合いな舗装路だった。

悩んだ後、僕らは南へ進むことにした。

北西に正門があるはずだから、そこからこの道が伸びている、と踏んだからだった。

「これは如何にも怪しい道だな。チエルノーブル市街地の道と変わらないくらいきれいなんだから。」

「少なくとも、やはり人の出入りはあるみたいだな。ほら、道にタイヤの溝が着いている。」

僕は自動車を使わない。石油動力もやはり放棄したからだ。しかし、ゴムタイヤがそれよりさらに昔の鉄輪にまで退化しはしなかった。

乗り心地は大事…ということ…か？

南へすすみながら、僕はさっきから気になっていることを尋ねた。「ところで、どうするよ。もしこの先に何らかの発見があったとして…、新聞社にでも売り込むのか？」

実際、現代文明のありかなんて発見したら、間違いなく新聞のトップを飾るスクープになるだろう。

しかも国を揺るがすスキャンダルというおまけつきなんだから。

「…もちろん実際に見つけてから考える話だけど、何となくそう言うことはする気にならないな。」

「どうして？ 結構な金になるぜ？」

「興味ないね。別にそれ程使い道もないし、金には困ってないしな。」

ほんと、変わったヤツだよ。

こんな好奇心旺盛なやつだったっけ？ほんとにさ。

クラダハイムと僕が出会ったのはミドルスクールの二年生…つまり14歳の時だ。

夏休み明けに転校生として僕のクラスにクラダハイムがやってきたのが始まり。

たまたま席が近くになったりして、まあ、たまたま気が合ったのか、仲良くなっただってわけだ。

それからもう五年近くが経つ…。進学やら就職やらで多くの友達と出会ったり疎遠になったりしているけど、こいつとの付き合いは変わらず、何となく続いている。

とはいえ、クラダハイムはあまり素姓を多く語らない男だ。ここに来る前のこととかは知らないし、一人の時に何してるとか、そんなことも話さない。まあ、こっちもそれ程興味がないから、突っ込んで尋ねたりはしないんだけど。

ただ、彼には親がない。

…というか、親が亡くなった為に、親戚のつてを頼って、この町に来たとのことだ。

もちろん親を亡くしたことは彼にとつての大きな不幸だけど、親戚たちはとてもいい人で、しっかりカレッジにも通わせてくれるし、独り暮らしをしているいまでも、多少の仕送りをしていてくれるみたいだ。

これが彼の素姓について僕が知っている全てだ。

しばらく歩いて行くと、目の前の森が少しずつ開けていくことに気付いた。左右の幅は広く、前の森は遠く感じられた。

なにか広場のようなものが向こうにあるのだろうか？

すると道の向こうにフェンスがみえてきた。禁じられた森の入口にあるようなのではなく、人の高さくらいの、まあ道の行き止まりを示す程度のものだ。

遠くからでは、ただの行き止まりか、と思われたが…。

「穴だ。大きな穴が空いてる。」

フェンスから十数メートルのところまで僕が気付いた。

夜闇でなかなかわからなかったが、それはかなり大きく、また深い穴で、直径は数十メートル。深さは、少なくとも上から油灯を照らしても底が解らないくらいはある。

しかも、明らかに人工的に掘削され、崩れないよう保護されているように見られた。

「下で何かやっているのか？」

少なくとも上からでは、中に人がいるかは分からなかった。

辺りを照らしてみると、細い道が穴を囲むようになっていて、丁度今いるところの対岸から階段がついていた。

下におりれるのだろうか？

フェンスについていた扉には鍵がかかっていたが、フェンス自体別に乗り越えられない高さではなかった。

当然、僕はフェンスを乗り越え、階段の前に立った。

穴の周囲をらせん状に下って伸びている階段で、やはりかなり深くまで続いているようだ。

僕はあたりに誰もいないのを確認して、階段を降り始めた。

## 序章2：レイディア・ストーン

### 序章2：ゼロ点

僕は長い長いらせん階段を降りている。

やはり、相当に深い穴のようで、なかなか底にはたどり着きそうにない。

ただ、地上にいる時は聞こえなかったが、いまでは、何か蒸気機関を稼働させているかのような音が、底の方から微かに聞こえる。底に近づくに連れ、その音は大きくなっていく。

やはり、何らかの人の出入りがあるのは間違いないようだ。

「なんだろうな、この音。何か機械のような……。」

「鉱山とか、そんな感じだよな。実物見たことないけど。」

段々はつきり聞こえてきているその音は、その期待もあって、僕らを近代文明に近付けているかのように感じさせた。

考えてみれば、こんな大掛かりな建造物（と言ってもただの穴ではあるが）もあまり見ることはないからな。ちよつとしたサッカー場なんかはすつぽり入ってしまいそうな穴なんだから。

底にたどり着くとまず目に入ったのは目の前の看板だった。

そこにはこう書かれていた。

・この先関係者以外立ち入り禁止。ここは第一種国有特定立ち入り制限区域のため、侵入者は法律に基づき、処罰される。又、関係者が何らかの事情で立ち入る場合も、必ずグランルーシ公認の研究者と同行すること。ここにある一切のものを持ち出す場合にもまた、同研究所発行の許可書が必要となっているので、注意されたし。

これはまた随分厳しいことが書いてるな。まるで軍用基地とか、

そう言うものの入口とかに書かれていそうな文句だ。

「『持ち出し禁止』ってことは、やっぱりなにか持ち出されると困るものがあるんだろうな。」

しかし、問題は、穴の底に別に目立ったものは見当たらないってことだ。

僕らはそこら中を懐中油灯で照らしながら穴の底を歩き回ったけれど、特に目立ったものはなかった。また、底から更にどこかに続くような通路も見つからなかった。

「持ち出すたって何を持ち出せってんだ。ここにあるのはせいぜい石ころくらいじゃないか。」

そう言って、クラダハイムが床を照らした。

その時、少し向こうの床の上で、ゆらゆらしたの明かりに反射して、なにかが光ったのが見えた。

「なんだ？」

二人が駆け寄って光ったところを見ると、拳大の石ころが落ちていた。

真つ暗な所では、一見ただの石ころと変わらないようにも見えた。しかし、懐中油灯の明かりに照らすと、それはやはり強い光沢があるようだった。

しかも、懐中油灯の火でははつきりとはしないが、少なくとも普通の石らしくはない何か特異な色をしているように思われた。

「なにかの宝石の原石だろうか。だとしたら結構な価値がありそうだけれど。」

「これが持出禁止のもの…なのかな。」

まあ、価値はありそうだけど…。近代文明を期待していた僕らとしては、少し拍子抜けだった。

「まあ、売ったらそれなりの価値にはなりそうだし、もらっとくか。」

しかし、それ以外は特になにもなさそうだった。

仕方ないから帰ろうか。と、話していた時。

「誰だ！おまえたち！なにをしている！」

振り返つてみると、青い光を放つを持った、人間が三人立っていた。

「やべえ！」

とりあえず、僕らは階段に向かつて一目散に走り出した。

幸い僕らは階段のすぐ近くにいたし、彼らとは充分距離がある。

僕らは全速力で階段を昇り始めた。

わけがわからない…。

機械音の正体は見当らなかつたし、大して隠すほど重要なものもなかつた…なにより…

彼らはどうやってあの穴の底に来たんだ？

地上と繋がるのはらせん階段一つだけだったし、その階段は僕らのすぐ後ろにあつたが、誰かが降りて来た気配はなかつた。

階段を昇りながら僕はそんなことを考えていた。

非常事態の割に冷静な自分に少し驚きながら。

息を切らせながら地上にたどり着くと、追手はもついなかつた。

あきらめてくれたのだろうか？

それも妙な話だが…。

とりあえず助かつたと見えて、僕らは階段脇の地面に座り込んだ。

「はあ…何とか逃げ切つたか。」

階段を昇るような足音も聞こえなかつたので、彼らは追うのをやめたようだ。

「…それにしても、やっぱり妙だ。彼らは一体あの地下のなにもない所でなにをしていたんだ？」

謎は謎を呼ぶということか。

僕らの探険は、更に疑問を深めるものとなった。

わかっているのは、この巨大な穴が、大事な『何か』だということ



と。

大事な『何か』だということ。  
まさかなにもないところを『第一種』立入制限区域にするはずもない。

第一種というのは立入制限のなかでも特に制限の厳しいもので、細菌なんかを扱う研究所や機密にかかわるような施設に適用されるものだ。

「君達か。穴の中に侵入したのは。」

突然背後から、男の声がした。

振り返ってみると、そこには研究者のような服を着た男が二人立っていた。

一人はかなり年老いていて、片方は若い青年だった。  
年老いた方がさらに言葉を続ける。

「あ、警戒しなくてよろしい。私たちは別に、君達を拘束したり、ましてや危害を加えるようなことをするつもりはない。

：ただ、ちよつと尋ねたいんだが：穴の底で、何か変わった石を拾ったりはしなかったかね？」

僕らは答えなかったが、彼は話を続けた。

「もし、よかつたら、それをこちらに渡して頂きたいんだ。君らも気付いているかもしれないが、それはとある宝石の原石だね。なかなか貴重なものなんだよ。」

年老いた男は、僕らが石を持っているのをさも知っているかのように言葉を続けた。

「そう、今言ったように、貴重なものなんだよ。だから、私たちにそれを買いとらせて欲しいのだ。」

そう言つと、若い方の男は馬車の奥から小さめのバッグを持ってきて、僕らの目の前で広げた。

そこには、かなりの額の大金が入っていた。

まるでなんかの小説にでも出てきそうな光景だ。

「どうか、これで譲ってもらえないだろうか。」  
表情ひとつ変えず（暗闇でよく見えないけど）年老いた男が言った。何なんだ一体？

僕は彼らを怪しむ気持ちと大金の間で揺れていた。この石を渡してしまつていいのだろうか…。

その時だった。

「ちよつと待ちなさい。」

どこからともなく女の声がした。

…かと思うと、森の影からその声の主かと思しき女があらわれた。そして、僕らに向かつてこう続けた。

「彼らにだまされてはダメ。その石を受け取ったら、すぐさまあなたたちを掴まえるか、殺すかするつもりよ。」

殺す…？本気で言っているのか？この女は？

僕らが殺されるかもしれないほど大事なものを、見るか盗むなりしたつて言うのか？

「なにを物騒な…。我々はただ、その原石を買い取りたいだけですよ…。あなたこそ誰ですか？いきなり現れて…。」

年老いた男がさつきより多少優しさを装い言った。

僕らがどうしようか決め兼ねていると、

「どうやら、話してもムダのようね。」

そう言つて、自分のポケットから何かを取り出した。

…それは、僕が持つ光る石と同じような石だった。

…ただし、女のもつそれは、火に照らされているわけでもなく、自ら青色に光っているようにみえた。

目の前がその青色の光一色になったかと思うと、急に景色が変わり、どこかの小屋のなかに僕らと女の3人は立っていた。…あれ？ここは…？

「僕は森のなかにいたはずなのに…？」 この女が何かしたのか？

「ふう。危なかった…って程でもないけど、まあ、もう安心してここは奴等には知られていないから、来れないはず。」

「…ここは？あなたの家ですか？」

「そう。まあ、禁じられた森の中であることは変わりないけど。さっきいた『ゼロ点』よりはもっと東側で、もうここはアルニカ領なんだ。」

やっぱり状況が飲込めていない僕らを見て、女は更に話を続けた。「まあ、わけがわからないのも当然か…。まあ、順を追って説明するね。」

といつてもどこから話せばよいやら…。と女がつぶやいたので、僕がとりあえず訊いてみた。

「とりあえず、どうやってあの穴から一瞬でここに来たんですか？」

「そうだよ。やっぱり最初はそこだよ。」

そう言つて、女は、さつき光を放っていた石をポケットから取り出した。

「あれはこれを使ったんだよ。このレイディア・ストーンをね。」

「レイディアストーン…？」

女の手のひらのそれは、先ほどのような強い光はもう放っていないかった。

「これはね、世界のいくつかの場所の地底で発見される石でね、小さくても強力なエネルギーが詰まっているの。」

エネルギー…これが？

「そして、さらにすごいのは、触れている者の意思を感じとること、その人が望む時にそのエネルギーを発することができるんだよ。その力で空間をまげて、ここに移動したわけ。まあ、宇宙が舞台の古典小説にでてくるワープみたいだね。」

「…ワープ…。つまり、君は、いきたい場所にいつでも行けると

いうことが…。」

「そう。あ、ただし、具体的に行きたい場所の『風景』を頭に思い浮かべないと意思が伝わらないから、一度はいった場所でなければいけないって条件があるの。」

「だから、さっき私は、やつらはここには来れないって言ったの。やつらはここにはきたことないから。」

「やつぱり、奴等もその石を持つてるのか。というか、これも…？」

「そう。あなたがさっきあの男に売ろうとしたそれもレイディアストーン。ただ私のとは採掘場所が違うから、少し種類が違うけれど。」

「と、言つと。」

「あなたの持っているのは熱吸収・放出型：石のエネルギー変換が任意に出来るから、周囲の熱を奪って石にためこんだり、逆にそのエネルギーを熱に変えて放つたりすることが容易なタイプ。何かの燃料がわりにするか、まあ、あとは、武器がわり使えるものだね。」

「武器…。」

「まあ、チエルノーブルのゼロ点で採れるのは、基本的にそのタイプなんだよね。あ、ゼロ点てのは、レイディアストーンの採掘場所のことを言うんだけど…。」

「つまり、あの大穴は、これの採掘場…てこと？」

「そう。チエルノーブルはこの石を少しまえから採掘し始めていて、少しずつ研究を重ねているみたい。燃料として…あるいは…。」

「武力として…。」

「そう」

「そうか、あのゼロ点が制限区域だったのは、この石のためだったのか…。」

「でも、あの穴、底の方には何もなかったぞ？見つけたのは本当にこの石くらいで…。」

「恐らく、それもまたこの石を利用した鍵装置かなにかがあるんだね。たぶんその石、鍵替わりだったのを誰かがおとしたりしたんじゃない？」

「鍵装置…。」

「石のエネルギーを応用すれば、それくらいは簡単だよ。」

莫大なエネルギーを意のままに操れるのが、このレイディアストーン、すばらしく、ただ、危険な特徴…。

わかる？大事な石を拾ったあなた達を無理やり掴まえず、あんな取引の真似ごとをしたわけ…。」

「…石を使われるのを、恐れただから…？」

「そう。なんてったって、あなたが強い敵意を奴等に向けただけで、エネルギーは放出してしまうから…。彼らもまだ、この石のことは研究中だから、恐れているのよ。その力を。」

「…それでも、なお、そのエネルギーを利用しようとする…。」

「まあ、仕方のないというか、必然なんだけれどね。国が他の国より繁栄しようと言うのは。」

「必然…？」

「実は、レイディアストーンが埋まっている『ゼロ点』は他にもあって、解っているだけで、世界で合わせて五つ。…この五つはいずれも、既に極秘でどこかの国が採掘、研究をしているみたい。」

「グランルーシも、それに乗り遅れるわけにはいかないってわけか…。」

「そうやってまた、文明進歩が加速していくのだ…。」

「なあ、それやばいんじゃないか？つまり、近代文明よりさらに進んだ文明が出来る…てことだろ。」

隣りにいたクラダハイムは、いままさに僕が思ったことを言った。

「また、戦争が起こったりはしないだろうか…。」

「たぶん研究している人達も、その不安をがないわけではないの。…でも、人は元々進歩を求める、進歩してしまう動物だから、目の前にその進歩の源流がありながら、それを無視することなんて出

来ないんだろうね……。」

人は、進歩を求める動物……。

『偉大な方』とやら。あなたは危険な文明を封印して、人間を救った。それは感謝するよ。

……でも、ダメみたいだ。人はまた新たな方法で、危険な進歩をしようとしてるよ。

……今度はあなたの厄介にならないですむと良いんだけど……。

しかし、そのレイディアストーンの力に、僕は不安を感じざるを得なかった。

### 序章 3 : 旅立ち (前書き)

今回序章が終わり、物語が本格的にスタートします

### 序章3：旅立ち

序章3：ケイコ

「…ところで、まだ自己紹介をしていなかったね。私の名前はケイコっていうの。よろしくね。」

僕らもそれぞれの名を名乗り、さらに僕が質問を続けた。

「よろしくケイコさん。でも、ケイコさんは、なぜこの禁じられた森に住んでいるの？。アルニカ領側だって、森は立入禁止区域なんじゃない？」

「うん。基本的に一般人がはいることは許されていないね。実は、私は国境を警備する仕事をしているの。アルニカとグランルースのね。」

「国境警備…」

「うん。と言っても、ここら一带は、密入国者はまず出ないから、そう言うのを取り締まる普通の警備員みたいな仕事はあまりなくて、まあ早い話グランルース国が妙なことをしてこないかを監視しているの。ゼロ点での様子も含めてね。」

「でも、ゼロ点はグランルース側だぞ？」

「一応、禁じられた森内は、向こうの領にも入っていいってことになっているの。ゼロ点の研究の権利をグランルースに渡すかわりにね。」

「…でも、ゼロ点への侵入者は、あなた方が始めてだよ。」

「…あれ、ってことはオレたち、このまま拘束…？」

そうか、この人が警備員なら、僕らは捕まってしまった…ってことになるのか…。

「そう。しかも、第一種制限区域への侵入は重罪って言うのは、知ってるよね。」

やばい。途端にやばい空気になった。



重罪つて、何年拘束されるんだ。10年？20年？

「…そう、規則上はね。そこで、少し相談があるのだけれど。」  
「と、いいますと？」

俄かに畏まらなければならぬような気分になってきた。

「実は、治安上問題なのは、侵入されたことが法に触れるとかいうことなんかより、『あなた方その石ころを手にしてしまったこと』なんだよね。それを売られたりして、悪い人の手に渡ると困るか  
ら。」

まあ、石を取り上げちゃえばそれでも良いんだけど、せっかく話を聞いたんだし、少し相談があるの。」

「相談？」

「実は、最近グランルーシ国の様子がひどく不穏で、レイディアストーンを使って何かをしようとしているんじゃないかって言う噂が流れているの。」

どうも、どこかに戦争をしかけようとしているって。

その話が本当なら、アルニカとしても防備を固めるとか、グランルーシを止めるとか…まあ、それは私のすることじゃないけれど、とにかくアルニカも、何らかの行動をとる必要がある。

それで、そのことについての情報が欲しいの。」

「えーと、それで？」

「あなた方に、そのことについて、調べて来て欲しいの。私たちアルニカの人が行ったりして、下手なことになると、両国の友好関係が崩れる恐れがあるから…。」

「オ、オレたちが？オレら、そんなスパイみたいなこと、したことないぞ？」

「あ、いや何も、機密事項を盗め、とかそう言うことではなくてとりあえず、帝都に行つて、法を冒さない程度に話を聞くとかでないから…。グランルーシは広いから、辺境のチエルノーブルまでまだ伝わってない話が帝都では聞けたりするって言うし…。」

それは確かにそうだった。13月の標準時があるグランルーシで

は、文化も情報も何もかも、帝都とこのあたりでは相当のタイムラグがある。

「本当、ちょっと帝都の様子とかを調べてくる程度でいいから…。」

「

「そう言うことなら、まあ重罪をチャラにしてくれるわけだし、やってみてもいいよな？」

クラダハイムの問いかけに僕はうなづいた。

もちろんケイコへの恩返しもあったけど、僕自身、グランルース国のことも、レイディアストーンのことにも気になり出していたんだ。

「それで、この石はどうするんだい？」

「ああ、それは持っていていいよ。レポートを使うと移動が楽し、非常に、ね。」 「でも、エネルギーが暴発したりしないかな。」

「実は、それを攻撃に使うには、対象一点に対するかなりの憎悪心なんかが必要なの。だから、それで攻撃するには、精神的訓練とか集中力が必要なんだよ。」

「だから、普通にしている分に、暴発することはまずないね。」

さっきのグランルースの研究者は、そのことをあまり知らなかったみたいだけど。」

「武器にするつもりはないんだろうか。」 武器の代わりにするつもりなら、当然知っていそうなことだが…。」

「その点もちよつと気になってるんだよね。まあ、たまたま何か機械とかに応用する研究をしていた人だったのかも知れないけれど…。」

「まあ、そこら辺も含めて、一つ帝都で調べてくるよ。」

「ありがとう。あ、今日はこの小屋の客間に泊まってっつてよ。明日お金とか、必要なもの渡すから。二人は帝都に行ったことはない？」

僕らはそろって首を振った。

チエルノーブルから帝都へは、汽車でも一週間かかる距離だから、僕らの知り合いでも、行ったことのある人はあまりいない。

隣国にはよく行くのに自国の帝都にはなかなか行けないうつても、ちよつと変な話だけだ。

「…そつか。じゃあ行きは汽車でいくしかないね。その運賃も含め、ある程度まとまった金額を渡すね。二人は学生？」

「ああ。でも、研修ってことで休めると思う。帝都に行くんなら

」

さつきも言うとおりに、帝都は全てにおける先頭に位置するところだから、学術的にも見る価値がある…。大学はそう思っているところがあつて、帝都への研修は、例えば旅行のようなものでも、奨励されている。

…さつきも言ったとおり、実際行く人はなかなかないけれど…。

「そう。そう言うことなら話は早いね。一つ、よろしく頼むよ。」

その後、アルニカには計三日通った。仕事の命を正式に受けたり、諸所必要な金や物をもらう手続きをしたりしたからだ。

その移動は今や全く苦ではない。僕らはアルニカには行ったことがあつたから、レポート可能だつたからだ。

そして、出発を翌日に控えた夕方、僕らは二人、馴染みの店で外食をした。

授業が夕方まである日は、たいていここで夕食をとる。

学生向けの安いメニューがそろっていて、しかもおいしいので、僕ら以外にも、ここの常連は多い。

僕らは『月夜定食』を頼むと、二人がけの席に座った。

「ここも、しばらくはこられなくなるな。」

「結局、金は何日分くらいもらったんだ？」

「そうだな…交通費を片道のみで計算すると、向こうでの滞在だけで三週間分くらいかな。食費にもよるけど。」

三週間…。行くのに一週間かかるから、約一か月の旅…。

「ま、毎日ここに帰ってきててもいいんだけどな。テレポートもあるわけだし。でもま、せつかく宿代をくれてるんなら、しばらく宿暮らしするか。」

「そうだな。」

「帝都フェルガナ…ツェントルムか、まさかこんな早くに行く機会が訪れるとはな。」

グランルーシ最先端の都市、帝都フェルガナ…ツェントルムは、僕らの憧れであった。

「友達に自慢できるぜ。」

「そうだな。」

それ程不安はなかった。別に危ない橋を渡るわけではないし。法を冒さない範囲でいいと行っていたからな。むしろ、ちょっとした旅行気分で、わくわくするくらいだ。旅行か…。テレポートがあれば、一回行ったところへは旅行し放題ってわけか。

便利だけど、なんか味気無いな…。

僕らは翌日に備え、早めに帰宅した。

## 第一章 1：大賢者エディルナ

### 第一章：大賢者エディルナ

翌日、朝八時に僕らはチエルノーブルの駅に集合した。

朝の駅は、仕事や学校に行く人で混んでいた。

そんな中、長距離路線専用ホームには、一週間かけて、チエルノーブルとフェルガナドを結ぶ、大陸横断鉄道が止まっていた。

僕らが乗る汽車だ。この先の長旅に備えた重厚な機関車は、他の汽車より二回りほど大きく、頼もしくも見えた。

僕らはホームにいた駅員にチケットを見せる。

「学生さん？旅行かな？」

「そうです。前々から行きたかった帝都旅行なんですよ。」

僕のこの言葉は、半分本当だった。

「そうかい。ここ一週間は天気もいいし、順調にフェルガナドまで行けるだろう。」

じゃあ、良い旅を。」

駅員さんに別れを告げると、僕らは汽車にのりこんだ。

僕らの席：というか個室は17号車で、かなり後ろの方だった。

客車の中は四人一組の個室になっていて、部屋の中には2段ベッドがふた組みとテーブル、トイレ、洗面所なんかが備え付けられていた。

七日間乗るとあって、個室は広めで、わりと快適そうだった。

僕らが乗り込んだ後、20分ほどして、もくもくと煙を上げながら汽車は発車した。

「さてと、一週間ここに乗り続けるのか。長いな。」

「フェルガナ市内を紹介した本見つけたから、少し読んどこうぜ。」  
なるほど、確かにその方が着いてから動きやすいし、暇もつぶせると言うもの。

それを見て見ると、フェルガナは東西を流れる2本の川の間につてあつて、さらに二本の川をつなぐ人工運河が市街地の北側と南側に流れていると言う。

つまり市街地は四方を水で囲まれている、中州のような土地にある。

町は主に東西南北の四つの地区と、市街地の中心に王宮と国政の中枢を兼ねた地区がある。

北側は駅があり、旅客扱いの船も運河から出る。加えて商業施設や娯楽施設もここに集まっているようだ。

西側は住宅地で、他病院とか小学校とか、日々の生活を支える施設が多い。

南側は工業地区で、蒸気機関による工場が密集している。

また、物流基地もここにあって、南側の運河からは荷物運送よの船が出るし、貨物駅もある。

そして、東側は政府関連施設があつまる。警察本部や国立の大学や研究所などだ。

なんとなくこの地域には、いま僕らが知りたい情報がありそうだけれど…。

「この地図見る限り、やっぱりかなり広いよな。なのに、すごく整然としているな。」

「景色とかにもかなりこだわった計画都市とのことだ。」

「楽しみだな。やっぱ。」

「ああ。」

僕らは何か期待のよつなものに胸をふくらませながら、その日を過ごした。

汽車に乗って三日目の夜…。

汽車はどこかの駅か待避所に停車しているようだった。

予定では三日目、四日目はカルタゴ溪谷やククル山脈を通過する、まあ汽車としては一番大変なところだ。

廊下のランプを頼りに時計を見てみたら、夜中の一時頃だった。

廊下では、車掌と運転手が話をしていた。

「どうする？もう予定の時刻を二時間すぎているぞ。」

「別に悪天候や土砂崩れの知らせも入っていないから、事故が起きるとは考えにくいが…。」

事故？

「しかし、どっちにしろこの先は単線だからな。汽車がここに来てくれないことには出発できんぞ。」

「どうやら、ここですれちがうはずの反対方向の汽車が来ないようだった。」

外の天気は穏やかだった。こんな日に事故…？

その後しばらくは起きていたが、汽車は発車せず、僕は再び眠りについた。

次の日の朝、目が覚めると既に汽車は発車していた。汽車は無事すれ違ったのだろうか。しかし、心なしかゆっくり走っている気がした。

山道だからか？それとも…？

その後、僕は身支度をし、朝食をとった。

事件は僕らが食堂車から自分たちの個室へ帰る時に起こった。

ガタンッ

「うわっ！」

突如汽車はブレーキをかけた。

僕らは廊下に勢い良く倒れた。

異常な車輪音が車内にこだまする…。  
キキキキキキッ

ドシンっ！ゴーツ

続いて前の方でなにかにぶつかる音と…。あれは何の音だ？

ガタン！

次の瞬間車両は横転し、僕らは車両の側面に横たわった。  
車両が地面上にこすれる音がする…。

「おい、おきろ！」

んん…

ん？

「大丈夫か？」

目を開けると、目の前に僕を揺り起こしているクラダハイムがいた。

「…ああ。」

体の節々が痛むが、軽傷のようだ。

「クラダハイムも大丈夫？」

「ああ、頭を若干怪我したけどな。なんとかた大丈夫みたいだ。」  
確かに彼は着ていたシャツの生地を包帯代わりにしていた。

見回してみると、車体は横転していたが、大破しているわけではなかった。

まさに横倒しになったまま、客車の形状は保っていた。

「…とりあえず、外に出てみるか。」

乗客を助けた方がいいか悩んだけれど、二人だけでは出来ることも少ないだろうからな…。



とは言え節々痛むからだで横転した車両からでるのは簡単ではなかった。

なにせ出口が天井にあるようなもんなんだから。

僕は手摺なんかに足を掛けて、二人がかりで扉をあけた。

多少歪んでいたのか、やたらと渋かった。

そのあと、壁のへこみなんかに足を掛けてなんとかそとに出ることが出来た。

外に出てみると、あたりは険しい森の中だ。まだ渓谷を抜けていないらしい。

あたりに人影はない。

まさか僕らしか助からなかったって訳でもないと思うのだが…。

車両の前の方を見て見ると、横転しているのは僕らの乗っていたところから4両前までで、その先3両は外見には無事に見えたが、更に先は…。

「あれ？向こうの方、どうなってるんだ？」

「何か変だぞ。」

僕は車両の上から客車をつたって前の方へ進んだ。

僕は横転しないで済んだ3両の一番まえのところで足を止めた。

「これは…？」

「…なにが起きたんだ？」

その先はあまりにもおぞましい光景が広がっていた。

なにかに衝突したようで、車両は線路から外れて方々に散っていた。

また、車体はどれも真っ黒に焦げていて、所々溶けてしまったりもしていた。

さらに、何らかの力が上から加えられていて、ひどくつぶれてしまっていた。

「こっちは随分酷いな…。」

「…どうしてこんなつぶれ方をしているんだろう？」

正面や横がへこんだりするのわかるけど、真上方向からつぶれるっていうのは…？」

とりあえず、相変わらず外に人がいないので、二人で出来るだけ車内の人を助けることにした。

そして僕らは、さらに奇妙なことに気付かされるのだった。

「おかしい。食事の時、あれだけ人がいたのに…。」

どの客車にも、誰一人としていなかった。  
死体さえもなかった。

「皆、僕らより先に外へ出たのだろうか…。」

それも考えにくかった。

さすがに怪我人くらいは出ただろうし、まだ事故がおきてからそんなに長い時間がたったわけでもない…。

時間はまだ午前11時。朝食をとった時間からでも、二時間しか経っていないかった…。

それに、荷物はたいてい客車に残っていた。

大きな荷物が放置されているのはわかるが、簡単に持って行けそうな手提げ鞆やショルダーバッグなんかも、客車の床に転がっていた。

人間はどこへ行ったんだ？

「…まあとにかく、人がいないならここにいる意味はない。さっさと脱出しよう。」

僕らはまた上向いた客車の側面から外に出た。

外は相変わらずの鬱蒼とした森。

空は青く晴れ渡っているはずだが、ここからは線路にそって切り開かれた隙間からしか見えなかった。

「この事故のことは伝わっているのだろうか…？」

「そうだ。とりあえずレポートしてさっき過ぎた最寄り駅に行こう。」

なるほど。これはこういう風に使っのか。

僕は、石を意識しながらさっき停車した駅の景色を思い浮かべたが…。

…あれ？

反応がない。いつものように石が光る様子もなかった。

「おかしいな。」

何度やっても同じだった。

なぜだろう。

仕方なく僕は線路をつたって駅に向かうことにした。

山道だからな。どれくらいかかるかな。

「なんかおかしい。奇妙にも程がある。」

石はチエルノールを出発する時までは普通に使っていた。

なぜ、こんな時にかぎって…。

そこから、小一時間程歩いただろうか。

相変わらず景色は鬱蒼とした森。細く切り取られた空。駅まではあとどれくらいなんだろう。

その時、僕は踏切に辿り着いた。

踏切…というのは大袈裟かな。けれど、確かに人工的な道が、線路と交差している。「なあ、道があるってことは、それに沿ったほうがいいんじゃないか。」

線路と交差する道は狭かったが、獣道よりは幾分整備されていた。

「そうだな。こっちを進もうか。」

近くに民家でもあればいいけど。

その時、何となく、その道を行った方がいい気がしたんだ。

まあ、直感でやつかな。

そこから何時間か歩いただろうか。  
道は相変わらずの山道で、上りも下りもして、麓に向かうの  
か、頂上に向かうのかもわからない。  
そろそろ道に出たことが失敗だったんじゃないかと、思い始めて  
いたその時だった。

道の先の方に小さく家が見え始めたのは。

「家だ！」

叫んだのはクラダハイム。

そろそろ遭難するんじゃないかってくらいの不安もあったから、  
この安心感は相当だった。

僕は家の玄関に駆け込み、ドアをたたいた。

「すいませーん。誰かいますか？」

森の中で僕の声は少し不気味に響き渡った。

「ふむ。入りなさい」

妙なロープを来たおじさんが出て来たかと思うと、いきなり僕ら  
を家の中に招き入れた。

妙に不用心だな。

僕らが盗賊だったらどうするんだ。

いや、もちろんそんなことはないけど。

家はいわゆるログハウスというやつで、丸太を積み上げたような  
壁、三角屋根からランプがいくつかついた照明が天井から下がって  
いた。

家具も主に木で、テーブルは大きな木の幹をスライスして磨いた  
ような感じになっている。

僕らはそんな居間か客間かの、大きめの部屋に通された。

気になるのは、テーブルの上には包帯と消毒液があること。

「えっと、あの…。」

逆にすんなり通されたので、言葉がうまく見つからなかった。すると、おじさんから話かけてきた。

「君達を待つていたんだ。たぶんここに来るだろうと思っていただけ。おっと、君は頭を怪我しているんだったな。」

そういつて彼はクラダハイムに近付き、てきぱきと手当てを始めた。

包帯を巻きながらさらに話を続けた。

「レイディアストーンを持つ者は、そろそろ現れると思っていたが、まさか列車事故に巻き込まれるとはな…。運命とは言え、『奴』も乱暴なことを…。」

…ま、あの列車事故が起こらないのなら、君達がここに来る理由もなくなるから、運命と言えはやはり、言えるんだろうな。」

「あの、何言ってるんですか？」

…この人はどうして列車事故のことを知っているんだろう。

早馬車が新聞速報を届けるサービスでもあるのか？

歩く限り現場からここまでは結構距離があつたし、馬車などとは一度もすれ違わなかつた気がするけど…。

それはまだしも、僕らがその事故にまきこまれた人で、それがここに来ることまで知つていたと言っているのか？

いや、そんなことよりも…。

「え？なぜ僕らが石を持っていると知つているんですか？」

「まあ、今も言つた通り、これも大きな運命の流れの一つと言つことだ。」

ここいらで起きていることも、列車事故も、その一端を担つていると言つことだ。」

「運命？」

ますます何を言っているんだ？この人は。

「名前を言い忘れていたな。私の名はエディルナ。この先君達と深くかかわる者だ。」

今はまだわからないだろうが、すぐにわかるだろう。

この世界は大きな運命の流れの中にある。  
それは別に今に始まったことではない。世界は常に大きな流れの  
なかにある。

しかし、この先近い未来に世界中の人々がそのことを痛感するで  
あろう、大きな出来ごとが起こるだろう。

…そして、その中心、運命の軸に、君達が立つことになるだろう。

┌

「なにか面倒なことが起こるのか？」

クラダハイムが非常にスケールダウンさせた意識をした。

「おれ達に面倒なことが？」

「…ま、いまはそう思っていてくれればよい…か。」

いや、ほんと意識だよ。ほんと。

とりあえずクラダハイムの手当てが終わり、彼は僕らのテーブル  
を挟み反対側に座った。

「君達は、列車事故後の車内を調べたりしたかね？」

「…はい。」

「…おかしなところがあつただろ？」

「あれだろ？人が全くいなかった事とか、前の何両かがぺっしや  
んこだったことか。」

「そう。そうだろう。」

「あなたはあれがなぜなのかわかっているのですか？」

「ああ、事故の原因も、事故がなぜあのようなようになったのか、も知  
っている。知りたいかね？」

僕らはうなづいた。

「うむ。まあ、いずれにしろ話さなければならぬがな。

あれは、このあたりに…このあたりと言っても周囲数百キロだが  
…このあたりに出る獣によるものだ。

列車はその獣に襲われたが為に、あのようなことになったのだ。

たしか、昨日か一昨日にも事故が起きたはずだ。それも同じ原因  
によるものだ。

最近あの獣はやたらとあの線路沿いに出没するのだ。情報がまだ充分に広まっていないのか、なかなか汽車が運休にならないが…。」

「獣？あれが獣？？どんな？？」

「獣と言っても…いわゆる普通の猛獣ってレベルではない…。最早モンスターと言うのが正しかろう。」

「モンスター？」

「ああ。レイディアストーンを摂取したことによって変異したモンスターだ。」

「摂取？」

「食ったって事か？」

「まあ、そういうことだ。」

石を食べた…？いくら獣でも、石を食べるものだろうか？

「ああ。食べたんだ。」

獣の性質にもよるが、自然界で生き残る為に、『強さ』を求めることもある。

エネルギーの塊であるあの石を体に取り込む事で、爆発的な進化が可能になることを、本能で知ったのだろうか…。」

「…あれ？でも、グランルースのゼロ点はもうここから相当遠いんじゃないか…。」

「国境を越えるが、ここから南のイルディアに別のゼロ点があると聞く。そのことは知らないのか？」

「知らない。おれ達の地元では世間の人にはレイディアストーンを知らないんだ。」

国が極秘にしているんじゃないか？」

そういえば、他の地域の人にはレイディアストーンを知ってるのだろうか。

僕らの地元では知っている人は（たぶん）いないけれど、意外と外の世界ではみんなが知っていたりして…？

「そうか。私は世間とかかわりを持つことはないから、その辺はよくわからない。しかし、極秘にしているのであれば、賢明であり、

また、危険でもあるな。」

「賢明であり危険…。」

「言葉が多くの意味を持つように、人や動物の行動にも、世界のある出来事にも、一つよりも多くの意味があるものだ。」

相変わらず『奴』は面倒なことをする…。」

「さつきから言っている、『やつ』って誰のことですか？」

仲のよい友達ではなさそうだ。

「ん？ああ、君達はなんと習っているのか知らんが、いわゆる世界を救いし者。あるいは、文明の破壊者…。」

…偉大なる存在…。

「その『大きな運命の流れ』もまた、あの偉大なる存在によって起こされるものなのですか。」

大きな運命の流れ…レイディアストーンが関わる、僕らが関わる大きな運命の流れ…。

「そうとも見えるし、そうでない、むしろ、『奴』ですら運命の流れから抗えないかのようにも見える…。」

レイディアストーンの出現は果たして彼の思惑の内なのか、それとも…。」

そこで彼は僕の顔を見た。目の前で話を聞く僕の顔を…。

「ところで、僕らは獣に対してなにをしると？」

倒して来いと言うことですか。」

「如何にも。奴は体内レイディアストーンで生き物を分解する力を持つ。」 「分解？」

「消し去る…と言ってしまえばわかりやすいか。列車の乗客乗員は全て消されたのだろう。」

「ほ、本当かよ…？」

「そんなことが？」

「レイディアストーンのエネルギーを取り込めば、不可能ではない。かつて開発された中性子爆弾と同じ原理で力を放出すればよい。」

「



「…で、僕らが助かったのは…？」

「君はレイディアストーンを持っていたからだ…。中性子エネルギーが放出されたときに君が君の石のエネルギーを反射的に放出させたんだ。」

クラダハイムの場合は…。」

「オレもそのエネルギーに守られたんだろ？」

「…まあ、いづれわかることだ。とにかく、君達ならばあの獣『ゲリユオン』を倒せるだろう。その石を使ってな。私も協力するし…。」

「あなたも石を持っているんですか？」

「ああ、もちろんだ。さあ、今日は休んで、明日の朝出かけよう。奴の活動は朝に鈍るんだ。」

話している内にあたりはもう暗くなっていた。

『ゲリユオン』…僕らに倒せるのだろうか…？

列車を潰し、乗員を消した怪物を…。

エディルナは、これも運命の一端だと云う。

僕らが軸に動く運命…世界を巻き込む運命…。

それがなんなのか、いまは知るよしもない。

でもきつと、このレイディアストーンが大きく関係するんだろう。そんな気が…した。

## 第一章 2：ゲリユオン

僕らは再び線路へ向かう。

エディルナの言葉に従って。

「『ゲリユオン』…一体どんな奴なんですか？」

いきなりの怪物退治だ。正直実感がわからない。

もうすぐ対峙するんだ…。列車の乗客をまとめて消した怪物に。

「レイディアストーンがあるんだろう？ならば、充分に勝てる相手だ。」

その言の葉信じるしかない。とりあえず。

「でも、必ず線路沿いにでるのか？それ。」

「もちろん怪物の心なんか読めないから100%とは言い切れないが…まあ間違いないだろう。ここ何か月かは、あのあたりをテリトリーにしているからな。」

列車を襲い始めたのは最近のことだがな。」

正直、怪物に出ないでもらいたいという気持ちもあった。

…でも、レイディアストーンがなければ太刀打ち出来ないなら、僕らがやるしかない…。

「もうすぐ線路だ。今日も列車は来るのだろうか…。いいかげん情報が伝わっていて欲しいものだが…。」

線路沿いの森は、なぜ昨日よりもさらに鬱蒼としているように感じた。

どこだ？どこからやってくるんだ？

僕は常にあの濃緑の森に気を配っていた。

どこからくるかはわからない。

どこからくるかはわからない。

「でも、エディルナさん一人では倒せないのですか？」

「私一人では倒せないと言いつれ切れないが、まあかなり危険な賭

けだっただろう。石も一個しかないわけだし。」 「石はやっぱりたくさんあったほうがいいんですか？」

「ああ。『共鳴』を起こすからな。」

「『共鳴』？」

「…複数の石のエネルギーが一点に向かって放出されるときには、エネルギー同士がその力を高めあって、さらに大きな力を発揮するんだ。」

「だから、石の個数が増えた時は、単純にそのパワーは加算的にではなく、幾何級数的に増える。と言うことだ。」

「幾何級数的に。」

「この性質もまた、この石が便利かつ、危険な理由だ。石ごとの相性もある程度のもとまった数のレイディアストーンが集まれば、世界など、簡単に滅ぶかもしれないんだよ。」

森は相変わらずの鬱緑色で。

そこからは何が出て来てもおかしくないような感じ。

木々がざわつくだけで、僕らはずいぶんびくびくとしてしまう。

そこら中に、なにかがいるんじゃないかという感覚。

無限の種類危険性を相手に警戒しなければならぬ感覚。

…しかし、その様な警戒は、ある意味必要がなかった。

その瞬間は思いの他すぐやって来た。

『それ』は僕らのすぐ目の前に、何ら警戒を抱くことなく、僕らより強いという圧倒的な自信と威嚇のようなものを抱いていた。

ゲリユオンが現れた。

木々の間から。

見たことなくとも、一目でわかった。

それは知る限りのどの獣の形とも違っていた。

一番近いのは犀だろうか。

だが、尋常ではない大きさの牙が二本生えている上に、背格好は象ですら蹴り飛ばせそうな大きさだ。

ゲリュオン…。

これが、ゲリュオンだ…。

その存在相手に、一瞬気が遠くなるような感覚がした。

しかし、エディルナの言葉が、僕をここに引き戻した。

「いいか、まず奴はレイディアストーンを用いた攻撃波を発するだろう。」

これは我々の石の力を発動させることで無力化出来る。」

「発動…。」

「いいか、まずは、意識を自らに集中させ、身を守る姿をイメージするんだ。」

そう敵が発する何かを受け流す自分をイメージするのだ。」

僕らは咄嗟にそれをやる。

確かに、ゲリュオンは一般的な意味での攻撃をする風ではない。なにかこちらを睨んでいるようだ。

目が乾いてしまいそうなほど、やつはこちら一点に集中している。

次の瞬間。

体はいいようなない重圧を覚える。

それはどの方向とも言えない、とてつもない重圧…。

とてつもない重圧にもかかわらず、それに押し潰されない自分に不思議な感覚を抱きながら。

尚僕らは、自らを貝に閉じ込めるがごとく、その石で身を守っていた。

ゲリュオンは次第に落ち着きを無くしてゆく。いら立っているのか？

やがて、重圧が消えたかと思うと、ゲリュオンは突進して来た。そこには苛立ちと少々の焦りが感じられた。

「今だ。今度はこつちが仕掛けるぞ。奴一点に対し攻撃したい気持ちに向けてるんだ！」

エディルナは僕らに叫ぶ。

僕らは言うとおりに、目の前の巨大な怪物に意識を向けた。

「畏れてを抱いてはいけない。畏れは己の攻撃心をそいでしまう。余計なことは何も考えず、ただ奴へ反抗心を向けるんだ。心配するな。今やこちらのほうが有利だ。」

僕は瞬きする瞬間さえ惜しんで、ゲリュオンへ気持ちいを向けた。

昨日の列車事故など…考えずに。

怪物と僕らの距離が10メートル程になった時、怪物の体が光につつまれた。

…かと思うと、その体は轟音と共に、僕らとは反対方向へ吹き飛んだ。

その勢いは木にあたっても止まらず、幾本もの木をなぎ倒しながら、森の奥の方へ飛んでいった。

やがて、その巨大な体がこめ粒程にしか見えなくなった頃、森の奥の奥でそれは止まったようだった。

僕とクラダハイムはその威力を目にし、言葉を失っていた。

ただ米粒になった怪物の方を見て、呆然としていた。

「…ふう。やはりな。3人で石を行使すれば、不慣れでもこれほ

どの力…。」

「…恐ろしい…。」

僕らがその石が危険であることを体感した瞬間だった。

僕らはエディルナに言われて、先にエディルナの家へ戻った。

彼は怪物の生死を一応確認してから戻るとのことだった。

小屋につくと、とりあえず僕らは食卓のようなイスに座った。

「…まあ、何ていうか…ケイコの言う『不安』が見えた気がするな。」

「うん…。たった3人で使つてこの威力…。でも…どうしてこんな簡単に威力を発揮出来たのだろう？」

「ん？」

「ケイコさんが言つてたじゃないか。石で攻撃するには訓練がいるつて。なのにどうして…。」

「さあ…エディルナのお陰なんじゃないか？あの人石をよく知つてるっばかったし…。きつと『共鳴』とやらを起こす時は、一人慣れてる奴がいれば充分なんだよ。」

確かにそうかもしれないが…。

僕の心の奥で誰かが言っている気がした…。

…そんな単純な理由じゃない。と。

ポケットの中の石の表面を撫でながら、僕は考えていた。

## 第一章終：森に遺されたもの

その頃、森の奥のある所では奇妙な音がする…。

何かを折るような音、液体が滴るような音…。

その音の方へ行くと、そこには既に息絶え、横たわった巨大な怪物と、一人の人間…。

彼はその獣の屍体をナイフでほじくっていた。時には邪魔な小骨を取り除きながら…。

あたりは地面も木々も怪物の血で染まっている。

しかし彼はかまわず怪物をナイフで突いている。

やがて、怪物の内蔵と思しき所までたどり着く。

邪魔な肉片を辺りに捨てながら、彼はさらに深く怪物に穴を空けて行く。

怪物はあまりに大きいため、彼は半身を怪物の体に埋めながら、『搜索』をつづける。

やがて、ナイフが堅い物に当たった所でナイフの手を止め、もう片方の手で怪物の中をまさぐる。

そして『堅い物』の正体を握り締め、彼は怪物から『出て来た』。

彼の体はあたりと同様に真っ赤に染まる。それでも、怪物の血はまだ流れ続けている。

それは確かにエディルナだったように思えた。

しかし、『最もエディルナに似つかわしくない何者か』のようにも思えた。

私とその男を特定し兼ねている内に、彼はなぎ倒された木々がつらなっているほうへ歩いて行き、やがて森の向こうへ消えて行った。

…彼は誰？

やがて、エディルナが小屋に戻って来た。

「あれ？ローブはどうしたの？」

彼が昨日からずっと羽織っているローブが無くなっていて、綿のシャツだけを着ていた。

「…実は怪物がまだ生きていてな…、ローブは奴の抵抗のせいで破れたんで捨てて来たんだ。ほら、少し怪我をしてみましたよ。」

彼は腕を見せた。シャツに5センチくらいの切り傷がついていて、その中の腕に包帯か布か何かがかまかれているのが見えた。

「…じゃあ、その顔も？」

頬や首にかけて血がついているのがみえた。

「いや、これは奴の血だよ。奴が首を振り上げた拍子か何かに撥ねたんだな。」

あ、奴にはちゃんととどめをさして来たから、その点は安心していい。」

「あんなに遠くに飛ばされて尚生きていたなんて…やはり恐ろしい…。」

同時に僕は、僕らの石の力にも再度恐ろしさを感じざるを得なかった。

あんな奴を倒したのだ。

あんな巨大な怪物を。

「それで、君達はやはりフェルガナドへ？」

「はい。この『石』のことを調べに行きます。」

「ふむ。やはり、『縁』というものか…。」

「…何がだ？」

エディルナは、クラダハイムを見てそう言ったように思えた。

「…いや。ここで事故が起こって君達と出会えたことが、だよ。」



実は私もフェルガナドへ行ってみようかと思っていたんだよ。」

「へえ、それはまたどうして？」

「先ほどのゲリユオンもその一つではあるんだが、最近異変がいたる所で起こっていてね。君達は試しただろうか。この一帯ではレポートが使えないんだ。」

「あ、そう言えば……。」

「そのせいでおれらチエルノーブルに帰れなかったんだものな。」

「……そう。このあたりでは、レイディアストーンの力を空間を対象に放出することができないんだ。」

そしてその代わり、一対象に向けた攻撃や、治療その他のために放出するのは容易なのだ。」

「……だからこの石に使い慣れていない僕らがいきなりあんな怪物に攻撃できたのか……。でもなぜそのようなことが？」

「わからん。だが、最近このグランルースで、レイディアストーンの兵器化研究を進めていると聞いてな。少し気になっているんだ。」

「その研究が、この地域に影響を与えていると？」

「……実はここから南に、政府直轄の地下研究所があるんだが、入口は一つしかなくて、それも帝都から直接でている汽車でのみはいることが可能な物で、ここから南に直接いってもムダなんだよ。」

だから、とりあえずその研究所は後にして、帝都でいま何が起きているのか知りたくてね。」

「なるほど。」

「それで、だ。どうだろう。せっかくだし、一緒にフェルガナドへ行かないか？」

「それは別にいいけれど……ここから駅は近いんですか？」

「近い、とは言い難いが、だいたい半日くらい歩いたところの村から乗ることが出来る。いまからだともう最終に間に合わないから、明日の早朝出発しよう。」

こうして、僕らはこのエディルナと行動を共にすることになった

んだ。

そうだ、最後にもう一つ気になることがあった。

ゲリユオンに対し、『共鳴』を使った時、僕とエディルナは『石』を持っていた。

でも、クラダハイム、君は？

夜…。

あたりは静まりかえり…と言いたいところだが、森の虫たちがそこから鳴いていて、むしろ昼間よりも騒々しいくらいだ。

男は森の中を歩いている。

何か目的があるのか。

それとも、ただ眠れないだけ？

「気分は如何だ。獣の屍の中に手を、軀を挿入れた気分は？」

「…さあね。」

そこで私は、森の奥にもう一人の存在を感じる。

それは男のようにも、女のようにも見えるが、はたまたまるで『人間ではない』ようにも思える。

「…是くして、私はまた願いに近付いた訳だ。あいつらの出現に依って。」

「何をまた…どうせ全て予定調和であろう？少なくともあなたからしてみれば。」

「まあ、そう云わずに。全ての出来事は必然と云えど、全ての出来事が台本になっている訳ではない。」

「あなたにも知覚できない『予定調和』があると？」

「前から云っているだろう？私は神では無い。むしろ、神からは最も遠い存在…。今回とて、元はと云えば想定外の出来事から端を

を発している。」

「…確かに。まさか彼が、クラダハイムと知り合いになり、此所までやってくるとは…。」

「我々にとっては想定外、しかし、運命線の上では、それも必然だったのか…。」

「如何にしても、既に幕は開けられてしまっている。」

「まして、ゲリユオンなぞが此所にまでやってくるとは…。空間放出を禁ずる結界が、一石二鳥に働いたと言うわけか…。」

「あれで移動まで任意にされたら、倒すどころか、探すのが一苦労になるからな…。」

「二人はざわつく木々の間で対面している。」

暗闇に私は何も見ることは出来ないが、エディルナの目の前にいる人間に心当たりがあるような気がする…。」

姿が見えないにもかかわらず…。「『気配』かあるいはそれよりも具体的な何かが私に伝える。」

「…しかも、ゲリユオンが列車を破壊したに依って、御前は彼に出逢えたと、云うわけだ。」

遂にフェルガナドへ赴くのだな。」

「…ああ。御前はその石を大切に持って、待っている。」

「…復た逢う日迄。」

「また会う日まで。」

刹那、全ての音が、映像が途切れたような錯覚に陥る。そして、気がつくとき、そこには誰もいなくなっていた。私を除いて。

私は仕方なく森を彷徨う。

記憶は限り無く薄弱。いや、ほとんどないと言ってもいい。ただ覚えているのは。

不必要な『憤り』のみ。

私は森を彷徨う。  
彷徨う…。

**第一章終・森に遺されたもの（後書き）**

次回からはやつと帝都です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4029e/>

---

Milestone

2010年10月12日04時10分発行